



洪く文集巻第二

目録

- 一 今迄のよき事
- 二 日列君ふてアセヨ
- 三 秋月法列業小遊小
- 四 南紀南興野氏一返書
- 五 花江伽羅之妙
- 六 待長之品 拙撰文章ノ格
- 七 修朝貝の銘
- 八 巻之偈



文集二巻之二

九 新話二章

十 林夕君天賜を賀し奉る記

十一 猿飼氏の廣次別荘小探ふ

十二 新話二章

十三 竹衣柳

十四 夏日下河原窟居

十五 夜気

十六 難波屋の松

十七 新話文ひる亭

十八 与州高月氏、杖を矯る

十九 羈中慈恵

二十 貝蓋の銘

廿一 洪水

廿二 青此物を矯一人の事

廿三 義士行

第一 葛のつらき

費信孟子
語ラ文曲スル
歟

不在話下ハ
元ノ世ノ俗語
是ハ扱屋ト云
心

琥珀ノ流
著々々々の月
あらん

黒半の黒き黒牡丹の黒あり。黒牡丹の黒は大黒の
 黒なり。大黒れ黒種白花よのちなり。あま。其白き
 抱白種の白牙あり。白牙乃ふあり。ひとの園
 牙と走根梅や咲く病を治せん常に吟ふ。不在
 話下。清水の噴紙雲を夕暮感神院社の名所哉
 抱る。西牙東ふあり。まろく夏腐哉。あらん。其音
 たくくのく。あらん。敷の床ふつ。ぬき火急
 牙あふきて急著人子施に。其時琥珀の流を流
 して樹の根を剝膚の露牙。短く暖比哉。あらん。

梅の下陰を以て紅血跡を人ぞ慰め唯れを解
せり。孤字のまれば路も照ふも或は悟のちりと
もたよりぬ。淮南の太子安室有りあつて後口ふ
も成してあり堂成拍へいぐー夏腐あ
るもこの首たぐえらうこたへん。角ト有て
鋭うもをさけて清し。下等聖れ靈物形
んとすともへ

豆腐の安室
淮南子

太蘭君を平河領の葛一桶を物あり

ちりりりり

第二 日別君有りて

みはうもつたつ御茶を御りまふ二か来はと
てまやーしは有わさる。ま流路の形樹緑おどく
お白ひて。一果序まの物あり。孤山れ路のちう虎溪
の水音。むららちま乃無さへま支枝を以て流風
之矣君の代の婆也有り一白くまるとて

孤山ノ傳
林和靖

別有り夏朽くら奥山こつては矣

亦三 秋月御別業之昔飯おけふ

む川ふはひん奇

あめとねハむへも家たりさたさの
み川さる川さふとの流るりり

古今ノ序ヲ以
テ流し
各語也

とゞろかり居

又まの神（いりく）洞庭祥風及ひ麓水吹（吹）如京（京）

我志め秋をこけと文目我（目）一乃（一）自然乃

三峰意出群（三峰）流ハ流（流）一く（一）不（不）三（三）峰（峰）一（一）意（意）解（解）者（者）也（也）く（く）重（重）

我拓子。風背（背）れさあ慈（慈）井（井）雨を深松小多（多）の意

晴（晴）喉（喉）わ（わ）れ忘（忘）部（部）乃山（山）風ハ曉（曉）の香（香）炉（炉）又（又）西（西）山（山）

東々之爽（爽）の秋（秋）も（も）ま（ま）く（く）の（の）水（水）露（露）。我（我）れ先（先）の青（青）穂（穂）

青穂（穂）、指（指）の（の）ま（ま）き（き）か（か）へ（へ）我（我）織（織）した。多（多）如（如）拓（拓）ひハ（ハ）握（握）ち（ち）の（の）朝（朝）を（を）歌（歌）ま（ま）て

維（維）鶴（鶴）巢（巢）を（を）そ（そ）れ（れ）小（小）巖（巖）の枝（枝）く（く）維（維）鶴（鶴）の巢（巢）我（我）れ先（先）の青（青）穂（穂）

千代の娘乃（千代）子（子）松（松）歩（歩）む（む）小（小）似（似）く（く）。躍（躍）る（る）う（う）如（如）し（し）。子（子）代（代）の何（何）一（一）先（先）の

一ツ三ツ四ツ。朱（朱）麓（麓）さ（さ）う（う）ま（ま）を（を）持（持）上（上）ま（ま）ハ（ハ）西（西）山（山）恭（恭）し（し）く

夜（夜）樹（樹）ま（ま）ま（ま）。海（海）城（城）言（言）く（く）日（日）我（我）さ（さ）め（め）月（月）を（を）む（む）之（之）辰（辰）

の光（光）ハ（ハ）遠（遠）ふ（ふ）う（う）や（や）た（た）。主（主）語（語）く（く）是（是）も（も）共（共）ふ（ふ）ら（ら）と（と）し（し）。

南山（南山）雲（雲）さ（さ）を（を）跡（跡）し（し）。名（名）以（以）字（字）名（名）も（も）や（や）百（百）を（を）あ（あ）ひ（ひ）ま（ま）あ

ま。風（風）の（の）紗（紗）う（う）み（み）眼（眼）下（下）小（小）蒼（蒼）あ（あ）し（し）。心（心）れ（れ）上（上）小（小）玉（玉）は

乃（乃）由（由）神（神）を（を）如（如）つ（つ）き（き）海（海）乃（乃）山（山）生（生）と（と）園（園）く（く）し（し）

け（け）あ（あ）く（く）。今（今）の（の）ち（ち）や（や）れ（れ）娘（娘）衣（衣）り（り）く（く）て（て）。民（民）海（海）民（民）さ（さ）ふ

聲（聲）く（く）園（園）了（了）言（言）き（き）亭（亭）小（小）宇（宇）也（也）池（池）上（上）乃（乃）法（法）紅（紅）ハ（ハ）萩（萩）萩（萩）襟（襟）

と（と）ま（ま）密（密）衣（衣）我（我）帯（帯）と（と）ま（ま）入（入）流（流）去（去）と（と）ま（ま）吹（吹）行（行）く（く）も

吹（吹）の（の）衣（衣）を（を）射（射）る（る）小（小）ひ（ひ）と（と）ま（ま）吹（吹）之（之）乃（乃）葛（葛）れ（れ）結（結）ぬ

新古今家持

外方ハのみむるれ山のきうううハ之に秋ハ来たり

甘棠よよ甘棠よつとよ。昔乎竹うれおちとふうき。先ん此

詩云蔽芾

甘棠勿剪

勿敗召伯所

憩心せ給ふふくの庭乃夕暮。むうー今有朝花

滴。今有朝花。斗み軍子うふて。此は秋

騷客五六人

童子六七人

論語先進曰春服既成冠者五六人童子六七人

暮年の返

古今流傳

新古今

秋風

不ころい

推考へ

別氏

ううを

日よ

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

はちう

螢火照文字 文字むきふ庭の草花を曇り如

梅邊秋屋一枝蜜々

一枝疎一樹言々

一樹松月是毛録

文集二

画ハ

遠檐点滴如琴筑

初序と共子昨雨乃握の聲

飛切甚詞

樽莊子

白花黒點基ノ下韓子有リ

飛を裁切く樽や 朝露

書ハ

琴ハ

石楠斜點葉。桐葉坐題詩
上別と川のふあり

烟是命
為予寫作
百梅園

月冥——烟を帛千梅の骨

まうとれまへハ事以下道輝又まう枯ワ
アささるまうく海く沈み——夜々冥冥を
くく廿八時雨の雪雲飛来し。鳴神の里を度
ひ。唇ハ沈みし杜若の唇を動し。雪枝子語り
秋の姿ハさうみんく。月暎を光りて雪をちり
四時まのあうに満ていつは定んハ地也——斜
陽よりみち張いさあひ。溪谷成てくハ噴霧は
本日能程来日ハ蒼成へ——雪花一日ハ見えうは
う枕のまへハ

斜陽

謂有
諸冊

書 南紀奥野氏へ返書

魚の樂をふてふ——む。人其奥子解成投て
奥をさるふ者か——釣網の為子海を離れ
て市に呼ま。生を先して價ひ活奥子百倍也。
事を好むの者。平魚成前キリおろして去——く
塩りてまらひ。枚梅乃桶を形アラタよ山嶽成干てた
と——ろく索ナリひ。打是組ま子ぬれハ伯叔も子
を握って手傳ふ斗り。ささぬいさたう。二夜め
味とあうさふ。藤小垣行し石成清め。其の家
く又外の飯をさして魚成病カウ——難と水——酸

平魚ハ

鯛也

伯叔ハ

伯夷叔齊
也

五外の飯
在子雜
篇ノ語

とらひ。耳きとつふ。若きとて子。別如人のまさり
とて。作本造りの肩平似のよひなる。二を
ら。銀とりて。ちやして。夢乃。若き。平。ち。ち。た。た
を。作。目。を。愛。す。若。是。世。の。朝。夕。朝。中。お。世
下。あ。い。と。君。子。の。情。ま。さ。る。不。み。と。ま。す。く。風。は
順。深。へ。香。月。う。み。山。平。画。き。平。の。月。日。も。墨
の。命。も。長。く。短。く。自。を。は。は。り。て。百。毫。不。満
た。い。や。る。人。の。心。奥。の。流。ま。清。く。松。道。言。記
海。の。松。風。一。束。蓋。の。塩。梅。硯。を。以。壓。と。ち。り。と。海
香。梅。庵。の。梅。む。く。一。粒。若。自。の。要。他。を。探。る。

定るれ風情字く小涼一

何そもすはひく。珍らよの。又。新。う。と。言
や。こ。う。く。け。こ。詠。才。捨。の。那。の。辞。辰。才
繪。才。打。つ。あ。て。信。之。ち。物。笑。又。由。晒。周
と。下。の。と。し。

卯月

半時之庵

流斜之翁



若し人の心の奥乃流流くと。平。の。と
若しを。此。若。見。あ。被。り。

花江ゆれぬゆもあううりかたしととたすあふ

才六 待夜の品 桐原文章ノ格

杜宇か一きうともおとしね書てそ実そのうき被。
稚うりー月うこくへてもいりそ似もはく屋き也。

いぬさ
あてき
小婢ノ名

あつ海世ゆらう怒る人さとも。あつ喉うらひ流せ
おくおとさあふ。孫ちうたいぬさ先さあてた
ふれとまふくへあつをよむりうーまふ人なう孫ふ
ふらあふおの時めくおと。髪平指をあてくこのキク
さあて悲む。常おき方小琴立あー一琴柱のこ
ちも乱るこのおうとんまきし。あうー一夜れ思ひす

うことああううて海の松風んん誰れと父のつねのとあ
そのちう種一時。語とりふこの志はせんううて今を
思ひあきうあがおれ驚うのうーあつねうう成ううん
まとあー羨望う人あう(おんうー)種はあふ。
よれはのちちのまいあううこあせかりひとうはる
よんぬくとやハツをせ持ッ。今こそと種まをまそら
とらんくお良うらち種ハ。強チよ睡まうまもんぬ
ハみつううおうーく種く。三つの般ハ續けらおひぬよ。
人きおま一衣と種をさうー。面を拭てまきあふ人
あつ海世種ハ。まう種おしきう小猿のうーら

編糰
今云モメリ
の事也
はしが知て
るの物なり

旅のあさ唐の衣きてそは静に針と糸と心空如
しハ編糰のぬきとるもまこと針もくもきて指も痛
くぬくもよると血もこあまにあらうや来る人のあ
道のゆくあり闘争ぬんよるも有るをぬき編糰世
吾能御告有なるんえと。州本よひとしは魂どり
もそめりくくと。雲をきくも雲を借くもあさちこれ
ハ織くハきくもまらぬぬいひむとさるるもあさち
くぬ。織くしやおとひはるるもハぬをきこしは心
けぬりしハ。我為斗と天の情を有るぬくおのりも
又空恐しき也。美樹風葉らた。浪の音れ崖とちつ斗

千吹降りて隣に環もれあすおのつき。屋根よふえ
あべ竹細あさちとや。印しめくあさあや。他人ありと
あつせん。息こころ人の命なり。うきとあつせん。何
事もあひひりよあめてしんせうも。雲風織成をじ
吹ふく。月正しく水平印して。まぬくくさ世を洗ふ
いんよあふ小。蟹の事今き。庭の事隔の戸と。世に
よりあさちぬりあれとおと人。竹んんと。藤子押的
まを。清く。因はらさるる。あつこのおと。しられた。何や
世をあらして。合款のふれと。よひと。みけて。きと。原
さま。おんあひて。いさ。君の。道。親の。掟。も。あつ。ありら

障子

あつた
ホツトク

へやうたこく結しき成来孫てあふいてた。
 もとくもあもたて。さうしてはしつらふと
 ぬく田子入。あつた。是しつて胸せらう。いふ入あふ
 とおまひ通せとも又あふんとれ将も心の冠なり
 たり。ん孫子孫あふさこお拙ま治ともんもあ
 さんう。さう。さう。あつた。あつた。あつた。あつた。
 どの孫う。さう。会珠あつた。眠もせく。あつた。あつた。
 ち。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 まで。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 その友也とも。世の中あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた

せ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 て。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ち。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 もあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ち。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 とん。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ち。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 へ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ち。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

ちく。いひくしてそくく、厨の西の方子孫子孫
 と。尻うきくうー落さ母とた降し。まさや此ハツを
 其持く。空懸しーく走り出てられ本うけに於て足跡
 留ハ居居もそくしーく去の先ありともまひんや
 ーくはら哉されはとてうがれまこまかみと後
 ーむさもあーく控く。あやーくさ控く。子て
 幸跡をさうして喚く力叫ありと神子侍へん様子
 可を押入てよき年久しーく平文ていなあふせとり
 此まのふと侍り

ヤハハ
 けらけら
 ぬらぬら

くの長乃履をまきりぬく
 くの長乃履をまきりぬく
 くの長乃履をまきりぬく

通ふ家のことくぬうーぬあうー成へー是より
 長を侍直る子の神ありんーと流く
 長を侍直る子の神ありんーと流く

才七 貝と流

鴻朝の蛇の盃を流を
 ねむよアキス

世貝の名をい離と呼へー

竹の子
 籾の
 隆季

竹の子籾籾此菓を新そへる

花を物くぬん玉のさのは身

とらふきり

宴ハ始して高ハ子とを玉乃菊

才八日、是好物

一 丈二

二 若菜

三 能

四 芝居

五 傾城

六 歎

七 歎

八九 歎

十 死生と病老と情銅具人

花とあさけとふすまやねくへ

古き偈

之文四葉十月念二次一字換十則病魔降去

才九 雑活 比叡之葉食異波之茶

春の日空——うらさるに空の人の心形もあつ二人連る

叡山へまゝ老の階上の急ぎし者此方へ立ちあふ六丈師へ偈
 又仰りよ立ちうへ——と云捨去りたり言と仰りまりのあへ一人
 立ち一人に記しにむくりおとまりに益もなれ月よ山坂を
 かきりん先ハ月とのころこもいり高銀言てそ人切お
 海の風をぬまらさく揃りく廠山へ上りそ思ふ必といひ
 物米のきて坊るあへ約るそありま後所しく何加とあ
 とへらまよといひひるまの葉先——まてんくし能志信へを
 回者葉をあつて一人の男ハ豆腐を厚く厚く長く
 四角小おりのたおまきりちや、うりて焼きぬも焼がらも
 山打はよ折入、まどくあつくりく葉の切ら先——をむく

昔ながら新よ入てはきさし生木の枝を折て笑みて
 いさく心まうせふまのまうて何やう名も知ぬ草くを引て
 管仲おけり出してきよあまうては折ハ佛と折つや折
 竹のまうて徴をてハ敷山及うお詠より連うまあま
 さたへま折枝をまやくなをまうておきてゆり
 とおアとんと云ちうてまきりあう詠へ一人の習ま
 りよハとののまのハみえうの月あハ折るまもま
 またるうんまはまなまをまうてまうて怒りへ
 常く大はハ掛るまはまの時ハた石の山もんまうてゆり
 草も同じくまうてまうて敷山まうてあうまをまうて出立

ころ常ふむまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 めまのまままうてまうてまうてまうてまうてまうて
 耳やまうてまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 して福おまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 風雪まうてまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 らくま人の心まうてまうてまうてまうてまうてまうて
 桐敷山まうてまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 あうまあうてまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 有るまうてまうてまうてまうてまうてまうてまうて
 おは信ハ香盤のまうてまうてまうてまうてまうてまうて

世を翻まごりねむさきたべおの不加城なる世りま
ま集地をふいゆて群集さへんるに一海に王城
の守護山と取り供くふまうひかへ有難そんり又
いふあうハ遠ううに堂山段うさうハくく云出
希ると我兩人の風雅れ有とぬさとのをさひ先是
非と論あたりあり何藝よなても上子下女れん
的意前各くうくねと一平例の老ひうこの出本
てあなうのむへんうさうも馬上うそ坂をより
くしとおもひまらて六田よりいふも疲らるるをう
て終り終りの引つけんおろし上ケて世々意花王堂

不至り

ら一然山世界のむを歌くくひ

中真実の風情世人を罵言して下りぬ

其後老女の方より一吐吐し侍ら折や人くくし不
の風色をうらりかして吾もよりの歌いぬれハ流傳乃
洞宗といふもの其序ありて世れうも初て去年の
まはうりあうりとうらむハたりらあまとも柔原も如く
吟也も如くおく不自也ありと志良うてハあま山人
叡山ふも料理東屋あわうしとおもつるう一仍てま白ハ
中出されぬりふき

一候あり起ると別業を看たんとを看たんとを言てら
る業を看明六つを言六つを他半取しあり一就武士屋
に又人を加ちと茶多くと我止る言仰よりあり一
下なりと茶度ともなく一傳道ともいひの家書も不入る
一書ありあり一或時は波さやうは又尼も不字四時茶
たここ斗看て言さハ云儀よりおとうあ有り一たお
ふありた噂へとあり一就一歩進ハ老婢あさつて
何とて云儀より茶多ふ茶の給言かへ一と云あり一
さ被ハたとハさやうのとあありハ何と云とくは
ていん何一よかへ一と云たうふあり六十斗の人あり

て強ひたりおはあり。是れよに云えんと云ハハ候と云やう
かやうくの事一さねいって公儀かといふて茶やと
むう月ハアおすとあり良くと一時的あり一たとハさやう
れ半ありハと一する取りと云うの老人暫く黙り
いのさま云儀よりとくありハ有や一た中死と一ありま
とハと云儀の口々ぬ是非なき事取りと依後先生
笑後ありき道の中も難のうへも

第十 林夕君眞の石菖をさく事あり

天狗ありし門く賀なる之記

義まる哉天をゆる哉時。時多能哉秋のそよひの人

うらん
訃也

休らふとき。ゆれ徒ら秋津例の石乃津代。長く
休らば正本のうららのむき不まをわらき。後郊
の民を撰天さう家遊信を挿ひ。理を採して
まの志のそを盡し。心裁ゆと採らしたまひ
くうよら。うらん日よきをぬく。見ゆり利あり
武門の英氣凜として。ま光と厚く埋まぬ玉
柏奇情子はうらら成ス。澄ひふまうらひ志を
らみあふ海州あり。夫として冬夏まなく清き露
まき花をひ。ま景緑の帯を裂きわけてぬい
をぬす。千花萬草りまらう。結て文かうぬや

玉柏奇情、
石ヨリ生れ
石昔也

と二行も
まろくうら
か人

こあめれわよれたもひまなく清く。大己貴の清
くろり叶ひ。ま一糸して香案りうらん
割世中目能魔をかみ。情語を延る我以常
程中も愛し終ふ。至まる哉時至まる哉。ま
の山陰り備へま家屋あ。志うくははしとま
有わくありとたるにおちしあ。又熱ひ
あらしをひひ。霧のまおらうらひ道瀧の清池
のほりふ挿とらまらうら。黄菊あまきく
おれよ。目らうらわらる哉時。到まるのあ。そのあ
まら。まらふま。まらうら時り。ぬりて。ま

林申の廊下
を影のま
と流らう

とくも少く秋の草木のあはれ
日のうけはこれ中平志らるる

と長巻酒を好て秋をメ抱く。其時比附の比喩を
らそかりて。秋和歌を作らん。ふさふさあると
且

柳菴集
白文集

柳菴集

と今日形小峰りて。一字は春光の秋風を草
色。故有て好む故有て交信。清くも雪の空を
く。嘆くも秋小。落るも秋小。吹きて共小
射地上等々。洋小豆能く小松の安むひと

八分
洋小豆のよ
寸馬之人

さき。昔行旅人の傍。反照してくと。故陰影ありと
先。岸能く。一の紅。火。影。池。水。亦。映。ま。ハ。や。波。流
葉を刻きて。春音を短く。花ひせんさいくせ
んさのやよ。秋のせんさいや

明のまを箱根のうみ能く嵐山

塘のまよくおのりて。夜まゆく。年。園の松風顔
あふま。人。唱。會。白。露。反。り。飛。ん。て。鐘。を。う。り。子。令。乃
園柳。愛。鳴。音。成。死。夜。さ。く。清。く。白。屋。り。ほ。く。人。そ。ま。歌
右各謝靈運
登地二樓
瀬。虚亭中。此。床。の。う。ち。子。ハ
さ。ゆ。り。ある。琴。た。ん。中。と。り。て。秋。先。並。す

かけさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん
けりさうめん

第十三 雑話二章

一 田舎のむらゐのと云半ハおとくおとく物多借を可
各情多き一村あり白雪和尚と言傳又あまた
不剃捨小人面の有ハ蟹を入れて居村小引は成
物引く是らんそむへに戸めくハ武文解世と云上方
あてハ平家後或ハ徳村解世と云是もそ生をうて
も其周縁方半をえんと云てあま新いれ
證に安きて岩の上へうりうりなほよんるや

ハあねも安みとらと幻術なうん
一 櫻え 禅師とらみ参り へふ貴人ありて
黄染く夏の中よ訪ありて袴を取居士衣を
袈裟をうけぬえをち符道の傳中よ交り
経をうけふ喜時又も人々交代の節黄
染山え物隠えをんともをまと多ひておれ
中人の厚幣干衣を忘袈裟をうけてけ道
有りたるをえて歸るきお成りあり 武士のそま
しき半くと大驚して幽園ありて後御園
の黄染派のお高を招待ありたのくおららる

あそ屋もくハ武士ガこゝろをなうけおの
志似をすゝ者もあややん華の事ハ之
とおアありやうし和尚云こゝろハ松をなす
物言も佛好志こゝろハ上もとありハた松
あそハ哉と云いふもや作ありやうし松ハ
松云く大華ハ釣松と云いハ畜生は
大切のやういつまや知入て諸人感ハ
今く暫く畜生的心アリ正ハ松も
道ハくやれ貴人も暫く修道ハ中叙
迦の教を魏譯して佛の心裡ハ叶ハ

ふハ一松ハ浮松の魂を似えんやハ修道の
まゝハ一松ハ先其法其及ありハ心經を
ハ心經と云ふれれハ佛道を感ハ
大古建立ありやうと云ハ一松ハ
我佛印松ハ東坡も

才十三 竹衣榭

多井八天ノ
字ト云天乃字をくして地ハ極北ハ多井の松つ
くまとなむも人乃世アリ賢おとむを
そむ。家子あり法ハ万の意。法交ありむはじ
きあり。是もふまにハ一松ハ夏子松ハ

るも秋秋の露夜ひくひ。るなく古され。のこ
 そ折ぬはる人あき。初夜よのほひかへ。夕と
 四時推かた。たハ衣カケ架や。厚れその博士乃ハ。は
 く。筑城と号ケ。そのハ。一文を。紙様さぬ。う。お
 たして。ハ。う。よ。む。及。さ。身。準。未。と。雲。は。も
 世。尾。漆。う。切。ひ。ほ。く。る。ひ。抽。し。く。ハ。陰。天
 氣。の。白。ひ。を。と。む。黄。加。紙。白。う。の。ち。や。う。く。せ
 不。切。う。ふ。妙。も。乃。う。これ。眼。と。刻。と。か。し。け。う。
 玉。う。け。二。足。此。浦。際。上。の。う。う。き。く。松。と。千
 草。も。為。絵。不。か。や。う。せ。一。陽。乃。力。と。光。子。深。く

テウビヤウ
 十六點ノ中

秋風の吹
 小くく白
 菊ハ下略

二はーら。か。う。く。志。く。片。を。本。乃。角。と。お。有。ま。ま。の
 左。右。ふ。き。う。め。さ。香。哉。あ。う。む。お。梅。お。を。奪。ふ。白
 中。い。う。う。あ。う。さ。よ。い。へ。も。嬰ナ栗。乃。香。と。あ。う。親
 お。ん。ぞ。の。あ。や。し。き。ら。け。か。う。う。や。と。お。ま。あ。り。お。ほ
 ろ。あ。ふ。青。や。け。う。う。あ。ま。さ。う。う。お。路。め。伯
 引。ま。れ。乃。宝。を。鈴。う。か。く。や。唯。乃。ま。の。好。と。紙。信。信
 亭。か。あ。る。と。う。と。真。あ。有。り。釣。衣。柳。又。風。情。清。く。
 我。竹。衣。柳。ハ。破。う。香。来。る。古。板。二。行。は。切。り。改。り
 き。る。紙。あ。り。と。あ。破。ふ。柱。も。か。う。く。と。う。く。や。釘。乃
 乃。も。お。の。道。信。あ。ま。は。小。ま。れ。堀。乃。稀。う。紙。さ。う。が

嬰栗ノ香
 小くく白
 菊ハ下略

〆くみはうしお翁よぬ居し。あやしきうり穴
 ちん。此君をまかしきちちて四年お海一が
 けち女乃あままとの。使の布を可下ふえと一
 作りと母は衣柄か。うり下一ハと。神くまの神の
 ぬめくみぬる人が。ぬ。宮くくおを常ふ富老。冠
 小酔るぬ国の権ひ。ぬ乃林をほくま。神白
 常子お復神とを祀る子真成。薄命を久く
 真成薄命 尋思して暮まきと後をうく。あしゆ疑ひ
 久尋思と子
 見君王賞と子
 後疑
 海まかうりか。ぬ。又はさかくと母おくあうき
 乃洞度。従り横よ標ぬ染せたり。さハめくくち

ぬめやうし
 長信
 宮詞

真成薄命
 久尋思と子
 見君王賞と子
 後疑

くさ穴偏りかき海。浪雲れ喜ハさくんさ

才十四 夏日下河原寓居

祝融
 禮記及
 山海經二説
 未安し
 南ふ神あり。ひやの玉ふハ祝融といひ侍り。火竜ふ
 しくらまぬくあゆさ。祝融とてや。志貴子の日より。か
 神のこころせ給やん。日輪午ふあうんとて。凝り。

年ふ苗まハ凝りてな。銭をうり。志りえの山あなり。お
 も乾きて。さハ花とてと。すり。ゆく牛席る。その毛海
 まし。く。替りて。池ハ泡をま。ぬ。とて。あ。陽彦ハ波を
 濁るを。然。況や。病侍人又ハ百里の旅を。二日。神と
 る人。あ。ハ。世の家を。子ハ。い。と。ぬ。ん。た。く。お。海。を。う。ん

陽彦ハ
 海底ノ神也
 山海經

寛平三日
六月十六日
妹のうらな
家名を名
物名

と。まへてよのふはきつたをいふも心にとりて
くろきうねげ執ると。たが。昨日寛平三日の
川風をみ働かなる妹うら申す。いとちうしく。そ
申り。うらしく。まへて。称名結とく。阿へる。いりて。夏
日の長たをよてあそび。うら。む。人。我。歌。交。を。歌。そ。い。の
ね。橋。を。か。ま。へ。て。風。を。す。ひ。き。ら。ん。や。我。早。平。堂。よ。氷。れ
結。を。け。ら。う。た。皮。の。麻。あ。う。さ。ま。は。ね。ま。ふ。う。富。て。夸。を
ふ。人。を。も。志。う。く。う。や。む。屋。を。え
引。負。し。さ。結。己。を。憎。む。累。さ。哉。と。い。ひ。推。積。み。む。う。海
津。さ。や。つ。あ。や。奇。と。も。耐。う。こ。ま。を。す。ね。う。う。く。子。時。を。時

氷敷皮扇
天竺蓮事

小西は平一ツ起。うら。ち。は。四。方。ハ。夕。迎。と。ち。て。雨。為。事。斗
のき。た。う。て。又。申。申。す。一。写。神。の。遠。く。ひ。き。市。人
お。う。形。う。て。今。持。来。う。世。終。ふ。今。を。海。は。わ。り。よ。と。行。惠
め。い。き。布。ひ。座。の。入。来。う。と。く。干。屋。る。物。あ。と。ま。う。い。ん。
あ。う。ひ。の。さ。は。取。も。さ。や。鄙。ひ。と。ま。と。中。く。都。の。所。の。考
う。ら。い。ら。先。しく。涼。しく。人。の。心。も。さ。ね。う。ら。ち。て。晴。う。あ
ぬ。も。先。い。さ。た。と。一。か。ち。く。ち。う。く。と。板。屋。ふ。ま。う。て。楓。を
その。木。は。と。な。う。や。う。川。形。近。の。枝。の。下。陰。初。秋。の。山
に。秋。之。り。あ。ら。ん。と。ふ。な。く。あ。る。言。う。そ。あ。一。初。く。て。い。の
は。ち。の。音。も。む。ち。しく。雨。降。い。は。ち。ふ。れ。走。り。重。ハ。あ。や。一

曾波ノ木
延喜式
大舎人
寮三有

楓
旧事本記

支障をはらう。お林原を画き。森ハ街は吹細うら。去る
 いは照りまゝに尚照りはく続ハ草ハ自ラ花をむきまひ玉
 も折る布とまを語人又去るあし。もや先てまゝと
 半らこの子をかくに。世のる皆はありさよ好いとあも
 へか程ひとよおがれ中ふまがと。そん我事先平
 風をばさ天下の熱を拂ひちるぬのはく去りか
 太勢をさしむのあしお文をす述こハ
 半程あはし。どうくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 て美園の息を洗ふ

道を穿て夕平 活る風乃音

まゝ一匹の寝るハまゝうねの目

才十五 夜更ん

れりふるいそくくあ屋みね
 及一 家おひとーきんー如
 亭進と はお裁議正て後小語
 るとく無ふ

ありとの竹夕アれ樹れたのきくう心を志は
 ころうも名残志くは。何れ続やなくあし
 く笑るも又志と形も。人の為あも家縁めれ
 もとすくひ求あ守とも。有能き下りれ恵み共

梧青杜府
門人

ふり花の生さちせ先取り下成取り。おとせ
これあけ憎りのあま。人らとたのまらん
おさあぬよりそ背世の境をうーあふ
され、苗時乃人必古人の罪をあけ、喫茶
のあれらるゝあま家も皆我程くのみ
るーを志しに、古人れたりむき張の考へく
せ、地をワきれ時をさうしに。自慙してた
あれ種を配るなりへー。行雲山のうーんみり
くゝん。梧青杜府あま痛む衣のともなりとそ
ひくくひ。野火茂即しき長をゆりてさう

風ノ乳
茶ノ一巻

奇袋
ワくつゝまもや
極の奇袋
あるやうに
おもしろい
おもしろい
おもしろい

風を起す風の乳房れ車たを煮進ん若き哉
ぬみ。破心し詩を解し奇、体をおき。東渡
よ遊ひ西渡平り。我の家おひしき人
一おたれらやみ作り。ハこれワさうぬ。あ
成心橋のやうな人。都の邦あ、君を職し
室を定めたり下を定め玉を多しんあ
くや多々種。や中と魂乃あま、鏡みやうすり。
考す平はくしみけお懐む神のあみ程く。
たしくおんり。あうーあふあー。乃
心たりむけぬん。あらもけ奇、あ、兎鄙老の

文書六二

〇七五

口ふつとひんききと感ぢりたり是傳る。續ぢり
よりけ東言人をぢみ一つまなく病の外ふ
るらふ。そはや心をせとつらん。歎書を讀て
和弁を心掛そは時はあはれつらん。秋乃
夜は月の光も寂しうりたりとす^補たるも。
吾も同笑風具傳うりて。表れ吾ぢひん
ふぢねもあらくくくねと二士をぢり。おぼ
れ老の心もさえぬともあや。續ぢり海どふん
かりは枕ぢひらふさくまはあつくくおとひん
ぢはひんききもあやとみ傳りしうり世に友

禅師指ハ
一指 禅ナリ

我胸上ニ
テ 禅ナリ
心

ふぬ己老と云ふ志望のあふをうりて。おとく
さこのたれ光を塚て時あつて日あらん珠ぢり
んとの忠告の心れら。ひくぢり如懐みぢり
ひ傳りも。矢を以射るうと一母屋形ぢり。
いづく禅師の指を伝んや。古人若し其矢を取
つて投下す。家獨上小中流ん。ぢり平行し
心抱んや海し。心乃過ち憚らるてあつて
とも光り形と玉れ珠。けきあふ実三とせはるぢ
縮るるぢ

第六 雜波屋松

富士乃暖いとき我陽一。庭のよみ雪を
約久し
 長く成る
 てこの花の露も三保の夕暮。芳根れむ
 とま万のりきる子代乃枝派。下園却く世家
 のきめふけものくま牙入ん

一夜て渡亭はあきみすの又月を
 どのそやめ歌をぬきは此をかくてとみよ
 伝

中七 報作 ぬこひ法を

花有ちとい及る指布高者有それ以小燈。旅通
 ふはのへーちよといへるあま。旅通とこのとき

員濃は法かへ事。渠と来らるる石くきる家
 老ふく糖よ後一。筆乃さぬ法さ如く
 家茂孫ををとおひね。武門の歳く同から
 形ふはちて△引くやあ一人目如き盤乃菴
 なくも心の何くおね方とと譲るをすく
 旅通便如くおまひ女合をまはるや長か
 るこひ。洛外おれり一を伝るる不章のねとこふ
 て。とに法寄を更しくかくみ走りうりなれ
 子主婦の口をくおひ乃法のそそ歌列せん
 自らあつこのお通みすへるまは。な紙うき紙

橋の上又ツ
木又橋ノ邊
浦崎ノ里ニ
生ケル橋の上
又ツの人ヲ
ミテ云々

知リて便を以て橋乃久人五ツ水樂一費と云流
ちよつ方へ一章に御わり志々々めいさ先なる奇
△
中とちさ正なり亭家よのききけより人の
そ後乃初くくたしひなきはきこも如く業
ふとるはきき續き一にその秋をさるる友を
ちよつ方へ女ハいゝく歌さるこ一してその言
ひとちと極て五條の橋れさふさほよひ月のあ
ふふあゝの表の他も髪ささきおる路一
けよ一とくくち中と極て如くちと續て

泣入るるを文ひ訴けのちよやを呼りけりぬ
けしと終不稀く知人如し

才十八 与列高月表在るに杖を握る

杖之詔 蛟ミツチ娘と号く

後叙而云 祇空杖之詔 幼童丸と号す

弊老朽掃之杖 桂法弟

桃竹杖引
老社方の詔
幸丸

也 岐く字六杖劔或与蛟龍爭重為告曰杖兮杖兮爾之生

甚正直 娘ハ其是娘の奇なりむまふ

甚正直は三字心アリ

此三字心有
杖主甚是
ト云

才十九 羈中愁夜

以のり難夜家より我風雨浪ををきて家より
 くる。とよ海遠き枕をきていねる。唐
 の故乃寢を積とちをる。とよ家さ構社の燈
 乃如園牙吹ちる。思ふあさう岩も清ふも
 かなる。使もあひも志くぬ日乃本の
 明る。我情恨むんの人海乃り。きも乞ふ。と
 か。痛。と。も。つ。腰。を。折。て。一。奴。を。解
 と。と。自。王。は。く。人。も。思。う。た。り。乃。言
 釘。あ。や。ま。き。と。夜。え。い。ひ。新。し。く。も。さ。し。人。ふ

盗人も思ふ
 斗のよ新
 蒙求

衣のの
 宋祇袖
 曲た
 曲た
 曲た

逢日ゆりて其下細乃と。き。心。も。や。る。也
 なくさ。の。衣。乃。子。代。を。一。衣。二。夜。と。現。家。う
 打。ち。あ。り。く。て。ち。る。形。く。ま。る。む。川。を。独。り。と
 自。下。も。あ。る。と。打。強。し。ぬ。是。は。忙。然。と。下。下。座
 一。を。家。は。く。つ。と。し。根。も。ぬ。く。情。は。れ。鐘。を。十。は。り
 切。り。と。打。笑。え。る。雨。小。嵐。小。朝。を。き。き。志。さ。る。と。く
 形。り。と。更。下。は。ま。し。と。や。より。馳。さ。り。れ。き。り。と。と
 も。あ。う。い。遠。く。あ。り。と。ぬ。の。貧。し。き。乃。脚。の。露。乃。我
 暮。ら。ん。と。切。り。乃。若。未。ぬ。る。ふ。き。の。ま。れ。ぬ。と。と。あ。り
 冠。社。も。今。い。と。ま。る。は。切。り。ふ。漏。く。改。や。し。き。あ。ら。も。

火うらのま
うらま
まのうらま
うらま
山依のうらま
をことんま

山依や借りとゆりきり経声を悼み
何事みやまや出せとやくと甚小いし
いふくかへーやとたゆやまきとく
くとおまき火うらま此きもこの
志ありきる小松とおのこあえるふ
法の志乃をつかぬくむらの若きふ
さうりーと竹破き雲かて客と
拙くうろくまの馬たぬ穀を
長くもくきかや。お建ふ
らぬかと自ぬかへーや。積又
あかしく行くと

それきり
おのうらま
でうらま
うらま
うらま
うらま

た休せはるのきおろくま。おとや風静らな
まもりのそ又月秋ありきり。一とせ
弁りる句り

一百ハタ
きりる

民多し茂草ふはさむや
は朝をかくいひりるを
き松り又午三多を

才二十 貝文盛銘

みー海江のそ被れとけり
あ庭の光をそへし中。時あり
とりとり。一飲三百杯乃を

酒池糟圃
紂本記

玉の光を月のかりり母。むれ鬼も鳥のさうも。命
照らすより。とうせは波酒池乃あき不のあされ
ゆく息をぬくと。次は酒池くや。却てまた
ぶくさくく。久米乃さく山文子。鬼なく。美古
の愁を拂ぬ。其玉も光此貝のくか。千此酒玉倒
と作る。

オセー洪水

水成ゆき。肌を捨。答。答。わく。あ。を。果。を。捨。よ。さ。と
これの境を。借。一。日。紙。包。と。月。を。偷。み。六。月。は。至
了。神。て。孫。る。さ。り。下。倍。十。月。を。存。て。神。サ。月。と。云

文の櫻

別神ある。水サ月のみありき。年月ふやう。雨と
ふる日も水と成。あも皆以人乃さうひ。然うと地
へ。樂しめら。は。う。むの。捉。た。う。智。者。ハ。世。の
結の。ゆ。を。琢。す。清。き。流。は。心。鏡。清。ふ。を。珠。子
族。又。入。ま。は。九。う。に。象。思。よ。う。と。ま。ハ。角。あ。り。と。一
て。系。は。流。き。彼。を。さ。し。て。ハ。思。を。い。さ。さ。森。を。孫。ひ
林。を。滅。て。出。良。それ。幸。福。の。鏡。と。な。り。て。ハ。涙。火。を
洒。き。約。年。を。さ。く。さ。あ。榮。私。を。お。た。鬼。の。怒。り。て
を。を。塵。せ。と。對。して。骨。い。う。り。奴。不。嘆。つ。た。み。つ。る
ら。多。う。い。お。よ。を。お。音。成。踏。ひ。く。仲。中。川。の。底

一節は仲中川の
底にありて
長考

今夕何夕ハ
先社カ行ノ語

とてもそむれどもさうりた。川あふ堤為て棟を
敷き。今夕へは是れ夕へそふ交り行キ江中
蛟を討るの御事。此茅屋棟ノ船あり。早苗を
まきその原より埋る。なみは乃里く。里のあふ
し。い里茂失ひ証叫ひ去。鼓吹し。園こく船を
以のちを換んて。真をえ。松下に倚て笑
て一句あり

一白之意
富天ノ呼子
戯人
雪川云故

雪川云故 雪川云故

あふそ垣も世能彼の立所とて。斗を求てそ
め。さなや。有てさのま。是にきて空一。か。は。み

とん一入障あさう。いう見晴る。我祝一。そ。ハ。水窓の灯子
そ。く。り

元文を先結と一六月上院

才七二 かく讀と一不拍哉

神の物と一ハ乃ともく

か。は。は。の。と。の。ふ。る。の。な。海。名。う。と。世。に。禱。く
論。々。と。り。あ。る。あ。ら。く。好。く。は。或。ハ。糖。子。漬。る。拍。中
へ。糖。乃。拍。と。云。又。ハ。大。根。を。以。テ。神。子。供。よ。り。く
神。の。物。と。う。神。く。や。云。訓。を。か。り。と。る。也。一。
皆。と。り。居。り。禁。中。を。是。輕。而。ハ。女。房。の。扇。と。り

おかし 裁まひりせよと 呼時 味唱をてりー 侍る
半上 古今 交也。みそは 漬くをわりのこれ
とら之。昔の字 裁下は 半文字 裁用るれ 余情
もるハ 是る 陰 淨のん なる 是る 業 凡 あり 如ち
南より 白ひ 来るる 事 あり 是る 事 也。此 於 皆 以 雅
の 要と 是る 事 あり ん。是る かり 小 漬 する 小 あり して
糠 子 塩 裁 加へて 大 根 を 漬て。家 しく 民 々 きの 朝
文 れ 事 とも あり ぬ。是 中 小 難 を 出 する 事 あり
也。稱 一 かり 漬 と 云。西 城 子 あり 似 する こと 子
あり ぬ。い の ち 家 かり 我 世 の き 白 かり や 事 あり ぬ。

筑紫
押使
佐藤 子 也

洞 度 の 傍 雲 葉 形 葉 と 到 て 凡 情 の こ 海 や ち
あり たり。朝 の 日 影 月 と 云 人 より かり 此 物 を
け たり。是 味 い ひ かり 是 け 羅 苜 八 筑 紫 葉 形 葉
押 使 使 々。朝 々 好 々 々 事 あり ぬ。や あり たり ず
あり ぬ。板 登 の 来 たり たり と 母 お ぢ ね の 事 半 事 あり
ら ー や 日 裁 する 事 能 たり たり 是 之 乃 歌 事 成 語 也

第三 義士行

竭 股 眩 之 力 効 忠 貞 之 節 繼 之
以 死 真 老 臣 心
人の 體 身 之 もの、ぬ の 深 見。大 よ う 侍 一 こと 也。

蜀相ハ
孔明ナリ

かゝるべきは如はんし。ぞりかゝるは群士の忠
信。嗟蜀相を主歎くへ。噫首如うとそそり
ぬ。天則賢ふあふまは賢ふあふまは又各禱
まそそらん。皆是平生憤乃みちるおし
白ひと昔一たを流ひく巻と如り。みよし
あつこれ川の川流。感とみしう巻乃足た
かふ世もあふまはとの月影。其光の流るは
まよふりしう。貴族の心ふ其光とまよふ
巻過まよふく長く光のとまよふ

其儀一
子孟子萬章

其義一や〜く〜のふさくら

蜀士の山さ
不二千橋を

元文五年

よみ〜奇先耳遠〜先ハ不字と云人あり
鳥丸光彦
まおほふ〜あす蜀士のね平た〜山さくら
かくれ〜の巻をん

淡い文信亦卷之二終

